

安藤忠雄の足跡

- 1941年 大阪に生まれる ①
- 58 プロボクサーになる=①
- 69 独学で建築を学び、安藤忠雄建築研究所を設立=②
- 79 「住吉の長屋」で日本建築学会賞を受賞
- 91 米ニューヨーク近代美術館で個展
- 95 プリツカー建築賞を受賞
- 96 高松宮殿下記念世界文化賞を受賞
- 97 東京大学教授に就任
- 2009 胆のう、胆管、十二指腸を摘出
- 10 文化勲章を受章
- 14 脾臓、脾臓を全摘出
- 21 仏レジオンドヌール勲章コマンドゥールを受章



こども本の森 中之島

子ども向け図書施設を寄付

「未来のためにお金を使って、残さずに死にたい」。その考えから、社会貢献活動にも積極的に取り組んできた。

産業廃棄物の投棄ではげ山になった瀬戸内海の豊島や東京湾の埋め立て地、大阪市中心部を流れる大川沿いなど各地で市民参加型の植樹活動を行った。また、阪神大震災や東日本大震災の遺児育英会も設立した。

近年は、「こども本の森」の活動に力を入れている。子ども向けの図書施設を設計・建設し、自治体に寄付する取り組みだ。2020年に大阪・中之島、21年に岩手県遠野市、22年に神戸市でそれぞれ開館した。

「激動の時代に自分の頭で考える人間を育てることが大切」との思いが強く、「子どもたちに考える力を養ってほしい。」「こども本の森」が10人に1人には役に立ってもらえれば本望」と話す。構想はバングラデシュなど海外でも進めている。

「思考力が地球を救うのではない」と話す安藤（昨年12月、大阪市の安藤忠雄建築研究所で）——中原正純撮影



状況受け入れ工夫する

2009年にがんを患い、胆のうと胆管、十二指腸を摘出した。その前まで、知人らの会食で「頭は大したことないけれど、元気が取りえだ」と話していただけに、青天の霹靂だった。さらに14年に再びがんが見つかり、脾臓と脾臓を全摘出した。2度の大手術を経験してな

お、世界中を飛び回り、精神的に仕事をこなしている。「食事に気を配り、運動もするようになったので、より元気がなったかも」と、こともなげに言う。

LEGEND
レジェンド

建築家 安藤 忠雄 81

一時代を築いた芸能人や文化人、スポーツ選手らの足跡をたどります。毎月第2、第4月曜日掲載予定。

1979年にコンクリート打ち放しの狭小住宅「住吉の長屋」(大阪市)で日本建築学会賞を受賞し、注目を浴びた。以降、傾斜する地形を生かした「六甲の集合住宅」(神戸市)、壁一面の十字の切れ込みから室内に外光を取り入れた「光の教会」(大阪府)を設計するなど、第一線を走り続けてきた。

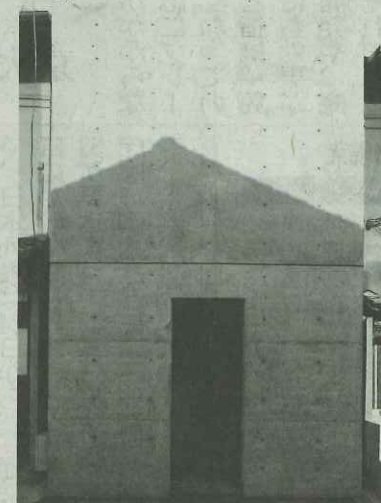
95年には「建築界のノーベル賞」と言われるプリツカー建築賞を受賞。21世紀になっても、建物の大半が地下に隠れる「地中美術館」(香川県)などを設計してきた。

それだけに大病はショックだったのではない。そう尋ねると「全然。内臓が五つも

なくなっただけで、ないなら

ないなりに生きればよい」。1日6回の血糖値の測定とインスリン注射が必須となっても、「生きるために必要な大したことじゃない。やらな

いことを嘆くのではなく、あるもので工夫して活路を見いだす。その原点は、大阪



「住吉の長屋」(大阪市、1976年)



「ブルス・ドウ・コメルス」(フランス・パリ、2021年)

少年時代に出会った大工 今も指標

の下の少年時代にあった。「三日にあげずケンカをし」ていたというほどのわんぱく少年。「ケンカでお金ももらえらな」と高校2年生でプロボクサーになったが、後に世界王者になるファイティンク原田のスパarringを見て限界を悟った。

一方で、建築にも興味があった。中学2年の時、自宅の長屋を2階建てに増築する工事で、若い大工が食事を取らずに働く姿を見たことがきっかけだ。「材料を工夫して何でも作ってしまう手さばきに魅了された。何より自由で楽しそうだった。一心不乱に働く姿を見て、仕事とは面白いんだ」ということを学んだ。

ボクシングは1年半ほどでやめ、建築家を目指した。経済的にも、「クラスで下から3、4番目」の学力的にも、大学進学はかなわなかったが、「どうしたら建築家になれるか」と前しか向いていなかったという。

屋は家具やインテリア、住宅の設計をして働き、夜は通信教育で建築関連の知識を詰め込んだ。大学の建築科に通う友人に頼んで専門書を何冊も買い、1年間で読破することも自らに課した。

その合間に、建築物を見てまわった。特に奈良の東大寺や法隆寺には足しげく通った。22歳の時には日本一周の建築行脚。1964年に海外

渡航が自由化されると、翌年の65年にはアルバイト代をつぎ込んでヨーロッパを7か月間旅しながら名建築を巡った。「30歳までに多くの建築を見ていろいろ考えたので知的体力がついた。それが後々に実を結んだのだと思う」

大病後、ペースを緩めるところか、「状況を受け入れ、その中で工夫してできることをやる」の精神で、ますます仕事に打ち込んだ。

ブルス・ドウ・コメルス(フランス)、LGアートセンター(韓国)、真駒内滝野霊園頭大仏(札幌市)、和美術館(中国)……。2014年以降の19の建築を収録した作品集「安藤忠雄の建築5」(TOTO出版)が、昨年10月に出版された。それを眺めると、充実ぶりがうかがえる。事務所を構えて50年余り。「建築を通して歴史を知り、人間の心に訴えかける建築を作る」姿勢に変わりはなく、「死んだらお金も何も持っていないのだから、利益ばかり追求しても意味がない。妻からも『全部使ってください。残してたら困る』と言われている。自由に楽しく生きていかないと。そういう人がたくさんいる社会はおもしろくなるはず」。少年時代に出会った大工の姿が、今も指標になっている。

(敬称略、文化部 森田睦)